

東日本大震災・原子力アーカイブ拠点施設
基本構想策定に係る検討会議（第2回） 議事録

- 日 時：平成28年7月28日(木) 15:00～17:00
- 場 所：中町ビル2階大会議室（福島市）
- 参加者：別紙出席者名簿のとおり
- 要 旨：以下のとおり

1. 開会

2. あいさつ

阿部文化スポーツ局次長からあいさつ

3. 委員紹介及び和田委員自己紹介

4 議事

(1) 展示ストーリーについて

(事務局)

資料1ページに基づきアーカイブ拠点施設の展示ストーリーについて説明。

(各委員意見)

- 地震、津波、原発事故を経験したからこそ、その分さらに、未来の安全について強調しなくてはならない。事故後、復興を遂げるに当たり、生活や地域の様子がどのように変わっていくか、そういうふうなものがあってほしい。事故を境に未来への安全始まったととらえていただきたいと思う。
- 風土という言葉があるが、その地形・自然のうえで、どのように文化や人々の暮らしが生まれ、そこから、どういう経緯で原発が立地されたのか、自然的な成り立ちから原発立地の政治的な経緯についてまで、この施設で知ることができたらいいと思う。
- 「日常は」、風土や自然などと同時に、やはり人も重要だと思う。双葉郡、特に富岡町は、比較的高齢化率が低く、21%程度だった。若い世代も高齢者も一緒に、三世代、四世代で暮らしていた家族がたくさんあった。震災前の日常といったとき、お祭りなど特別なイベントだけではなくて、そこにある人々の普通の暮らし、当たり前に行っていた日常の暮らしが、思い出されればいいと思う。
- ふるさとの日常の部分はこういうすばらしい日常があった。⇒それでもこういう課題があって原発を誘致した。⇒それで、地域はこのように変わった。⇒震災が起きて、さらにこういうふうに大きく変わったというように分けた方が良く思う。日常が最

初でその次に原発誘致と、時系列で二つに分けた方が、原発立地自治体の職員が研修に来たとき、自分のこととして、展示を見てもらえるのかなと思う。

- 資料1 ページのストーリーは、ジャンプのステップアップがどんどん進んでいくイメージだが、矢印どおりに、きちんと前に向かいたいという思いがあるが、そうできない事実が福島にはあるということを、来館者がいつ来ても理解できるような展示が重要だと思う。
- 日本中、世界中から来ることを想定すると、「世界の中の福島とは何か」、「日本の中の福島なのか」、「福島でなぜ原発が」というこの3点についてしっかりと展示する必要があると思う。

(2) 展示・企画テーマとそのコンテンツについて

(事務局)

事務局より資料2から3ページに基づき、展示・企画テーマとそのコンテンツについて説明。

(各委員意見)

【ふるさとの日常、原発の立地について】

- 人々がこれまで長い年月の間、その地で生活してこられたのは、自然環境という側面も大きかったと思う。それがひいては原発の建設にも結び付いていく部分があると思う。
- 前あったものは確実に変わっていくという現実がもうそこにあるが、何が失われたのかということをしちゃんと理解してもらわないと、アーカイブの意味をなさないと思う。そういう意味で、この「日常」という部分は重要になると思う。
- 一番失われたのは、家族との当たり前の生活。ふるさとに当たり前にいたおばあちゃんや子どもとの生活がなくなったことが一番大きいと思う。
- 一番失われてしまった日常は家族であり、人とのつながりやコミュニティ。
福島県はすみやすいところだったとか、若いうちから家庭を持って、親子三世代で住んでいたとか、そういったものを伝えるべきだと思う。例えば福島県は初婚の年齢が全国で一番低いとか初産の年齢が一番低いとか、震災前は移住したい地域で47都道府県で常にベスト3に入っていたことなど。福島県がすばらしい土地だったということを表すデータを丁寧に掘り起こすことが大事だと思う。

【震災の記録・記憶、復旧・復興の姿について】

- 双葉郡には双葉地区教育構想という教育構想があったが、それは双葉郡の教育向上から県全体の教育までを考えた教育構想だった。その後の震災により、その教育構想は、バラバラになってしまったが、今、広野町に「ふたば未来学園」という、双

葉地区教育構想を受け継いだ形の学校ができた。この流れは、再生福島を進める「教育」というくくりのストーリーだと思う。

- 震災後、地域住民の交流により、伝統とか民俗芸能などが継続されていることについても入れた方がいいと思う。
- 追加コンテンツとして、被害を受けたことだけでなく、ボランティアとかNPO法人、クラウドファンディングなど、震災後、新しく生まれた活動も入れた方がいいと思う。
- 一般の民間企業の活動も多かった。そういった民間企業の社会的活動、CSRというものが大きく転換した時期だったと思うので、そういった部分も取り上げてほしい。
- メディアのあり方も、この震災をきっかけに変化している。その変化が震災において、どんな役割を果たしたのか、何ができなかったかみたいなのも残すべき。また、新聞、テレビだけでなく、ツイッターやフェイスブックなどのソーシャルメディアの存在が、阪神大震災との違いでもあると思うので、入れてほしいと思っている。
- 海外や企業からの支援への感謝の部分も入れてほしい。
- 南相馬市及び富岡町において、臨時災害FMというものを立ち上げ、被災地から全国に発信して、避難している方たちに聞いてもらっている。そういうことも復興・復旧の中に入るのではと思う。
- 観光の所に、教育旅行などの人数回復とあるが、震災の体験を語るなどの震災学習をしてきた影響が大きいと思う。このアーカイブ施設においても、被災者が震災を語り伝えて、震災学習を支えていくことがすごく大事なことなのではないかと思う。
- ふるさとに戻る人をサポートしてきた人が抜けていると思う。例えば震災直後、行政の方がどういうふうに情報収集を行い、避難先を獲得し、避難先での生活をどのように助成してきたかなど、それは今後、災害が起こる可能性を考えると、未来のために残しておくべきことかなと思う。
- 野島断層や雲仙普賢岳のように、災害時の現状をそのまま残すことも大事だと思う。何も説明文がなくても感じ、伝えることもできると思う。
- 震災遺構について、宮城県には、南三陸町の防災庁舎などがあり、非常に悲惨な状態で現在も残っており、20年間様子を見ようということになっている。災害の恐ろしさを伝える、動かないものをいかに拠点施設のコンテンツに組み込めるかということは非常に重要だと思う。3Dや映像として見せるという方法はもちろんあると思うが、やはりそれ以上に実物の持つ迫力、怖さなど、そういうものもあると思う。
- 現在、福島県で震災遺構として残されているものはおそらくないと思う。住民の方々のご理解とかが得られなく、残せなかったものがほとんどだと思うが、まだわずかにこの恐ろしい災害の痕跡を残す不動産や自然が残っていると思う。それをいかにこの施設に取り込めるかについて検討する必要があると思う。
- 現在、本当に多くの団体、個人が震災学習のため富岡に入りたいと希望している（

特に海外、県外の方々)。その震災学習の中で、無言の中ですべてを感じ取れる場所がある。それは、夜ノ森の桜並木の途中にあるバリケード。あのバリケードの前に立つと、今まで説明していたことのすべて感じることができる。

- この資料の中に放射線への影響と小さく書いてあるが、放射線とは何かということ最低限わかるような説明は必須だと思う。このままストーリーに沿って進むと、放射線とは何かわからないまま、見終わってしまう気もするので、学べる場所は必要だと思う。
- 自治体の活躍も入れるべきだと思う。県内、特に双葉郡の町村はもちろんだが、他県から派遣で来てくれたことはすごく大きかったので、そのことをアーカイブとして残してほしい。あと、国の政治の流れについて、この復興の期間の政治はどう変わったということは、ほかの国から来た人たちは見たいと思うので、小さくてもあったほうが良いと思う。
- 震災は、漫画や音楽などのサブカルチャーにも影響は与えたと思うので、小さくてもそうした変化についてもあったらよいと思う。
- このアーカイブ拠点施設の中心となるものはなにか。地震、津波も重要であるが、世界の人たちが見たい、聞きたいというのは、きっと原発事故の現状だと思う。
(休憩)

【未来/再生ふくしま】

- 語り部や民俗芸能を保存している団体があると思うが、そういう団体が実演できるような実演スペースのようなものを、コンテンツとして入れた方がよいと思う。
- イノベーションコースト構想と廃炉状況、ロボットの最新技術体験について、廃炉は廃炉一つ、項目化したほうが良いと思う。廃炉は世界的に見ても大変注目されているから、堂々と出したほうが良い。
- 福島ブランドのところで農産物の新しい価値創造とあるが、その農産物の何が新しい価値なのかというものを整理したほうが良い。テーマとしては「安全・安心」と「生産者と消費者のかかわり」などがあると思う。これらは、震災前と比べ、変化があったと思うので、入れた方がよいと思う。
- 震災以降の価値観が変化し、例えば、家族との時間を大事にするとか、震災以降、人の生き方が大きく変わった部分だと思う。
- 震災後、県内の生徒さんたちが海外に向けて復興をアピールしてきた。それは今後とも、継続されると思うので、今の子どもたちがこういうことを海外に向かって発信しているということをアーカイブとして残していく必要があると思う。
- 震災・防災学習というテーマの中に企業、学生、一般等の来館者の特性に合わせたプログラムの提供という記載があるが、私も、毎週のように東京の企業研修の受け入

れを行っている。企業の方が、何を学びに来るかと言うと、人が避難していなくなったこの地域において、どのように事業を立ち上げていくかというプロセスの部分。

- 県外、国外の方がこの福島に何を求めているのかという視点はすごく大事なことだと思う。
- あまり規模を大きくし過ぎて、あとで行政負担になるような形ではなくて、行政施設も持続可能な形でやっていくということが、今回の震災以降のやり方だと思っているので、今回の施設運営自体も、他施設の参考になるようなものになるのが理想だと思う。
- 震災の語り部事業をずっとやっているが、リピーターがたくさん来ている。彼らは何を知りたいのかと言うと、それは、原発事故、そして、事故があったその町がどうなっていくのかということ。ここが一番のテーマとしては、原子力発電所というものを持ったときに、その地域が何を覚悟しなければいけないかということだと思う。
- 福島は、今まさに I N G、進行形の中だから、外部の方はその進行形であることに興味があるのだと思う。過去を振り返るだけではなく、今、年ごとに日々こう変わっていく、それもいい方向に向けて変わっていこうとしていることを示せるような展示が常に行われていれば人は来ると思う。

(3) その他

- 新しい施設については、津波等の被害から守ることができるような場所や建物の工夫、ということは必須として考えていただきたい。

5 閉会